

JICA による現職教員特別参加制度の普及と 開発途上国での経験の活用に向けた取組

国際協力機構 青年海外協力隊事務局

1. 制度の普及

1.1. 現状把握ための情報収集(制度のレビュー)

- ・現職教員特別参加制度により参加した教員から意見聴取(H19年2~3月実施)
→評価報告書
教育現場にとってよかった点、経験の活用事例、今後の応募促進に係る問題点等を把握
- ・派遣予定者を対象とした応募促進策に係るアンケートの実施
参加に至る問題点や今後の応募促進に係る問題点等を把握

1.2. 広報

- ・JICA のホームページ, 広報誌を通じて紹介
- ・「現職教員特別参加制度」, 「現職教員特別参加制度(日系社会青年ボランティア)」紹介リーフレットの作成・配布
→全国国公立小中高等学校及び教育委員会に対し送付
- ・現職教員特別参加制度紹介 DVD「世界に飛び出せみんなの先生」の作成
- ・年次研修(初任者研修等), 校長・教頭会, 教科研究会における制度の説明
- ・JICA 市民参加協力事業として実施しているエッセイコンテスト・教師海外研修等に係った教員へのリーフレットの送付, エッセイコンテスト, 教師海外研修等の説明会において本制度の紹介を実施。
- ・教育新聞社定期購読誌を活用したポスター&記事の送付(対象部数:23万部程度)

1.3. 理解促進

- ・地方自治体理解促進調査団の実施(目的①現職参加の拡大, ②経験者の活用促進)
(H20:兵庫県教育委員会, 大阪府教育委員会, 埼玉県教育委員会 H21:和歌山県教育委員会等)
→現職教員の活動現場の視察を通じ, 事業の意義や経験を通じて得られる効果について理解を深め, 制度の理解促進策や帰国後の現職教員活用方法等を検討頂く。
- ・各教育委員会への制度説明の実施

2. 開発途上国での経験の活用の推進

- ・JICA 市民参加協力事業(出前講座, エッセイコンテスト, JICA ネットを通じた交流事業等)を通じた学校での国際理解教育実施支援
→出前講座は, 学校で途上国理解を深めるため主に協力隊経験者を学校に派遣し, 途上国の状況を紹介する制度で, 帰国教員もその担い手となっている。
→エッセイコンテストは, 途上国や国際協力を題材に子供たちにエッセイを書いてもらうもので, 投稿に至るプロセスで様々な形がかかわっている。
→テレビ会議システムを通じ, 日本国内の学校と海外の学校等との交流事業を実施している。
- ・現職教員帰国報告会実施(文部科学省, 筑波大学と共催)

→協力隊事業に関心のある先生やこれから参加する先生方に広く公開し、現地での活動状況や今後の経験の活かし方等を紹介している。

・教員ネットワークとの連携

→協力隊経験を教育現場に活用していくことを目的に各地域に教員ネットワークが立ち上げられている(現在、兵庫県、京都市、大阪府、長野県、関東地域)

兵庫県・長野県・関東については、ネットワーク創設当時より JICA が関与

・日本教育新聞社主催「教育セミナー」との連携

→2009年8月に兵庫で実施された教育セミナーにおいて、分科会の一つとして、「国際教育」をテーマに、途上国経験の教育現場における活用事例を発表した。

・文部科学省イニシアティブ事業 宮城教育大学による国際理解教育研究会実施にあたっての連携

・文部科学省イニシアティブ事業 愛知県立大学による現職教員(日系)支援との連携

日系社会での活動経験を帰国後どのように教育現場で活かしていくのかについて調査、検討を実施中。

・文部科学省国際開発協力サポートセンター・プロジェクト 東京都市大学・科学技術国際交流センターとの連携による調査研究:「青年海外協力隊「現職教員特別参加制度」による派遣教員の社会貢献と組織的支援・活用の可能性」

以上

教員ネットワーク構築に向けた取組と 「現職教員特別参加制度」の効果的推進に向けた課題・提案 ～関東教育支援ネットワークから～

東京都町田市立南つくし野小学校 教諭 吉岡康裕
(H12/2 タンザニア理数科教師)

1.はじめに(関東教育支援ネットワーク)

『関東教育支援ネットワーク』とは、青年海外協力隊経験者に限らず、開発途上国での経験を日本の教育に生かしたいと思っている人たちが集結し、平成21年より活動を開始している。日本の未来の教育への思いと参加者の互いの信頼関係で成り立っている会である。

活動内容は、(1)参加者の教育に対する思いの情報交換と共有、(2)協力隊経験のある現職教員の日々の授業における実践事例報告と共有(国語科、社会科、国際理解教育等の授業実践)、(3)派遣前、派遣中の協力隊員との連携や支援(理数科教師、小学校教諭)、(4)学校現場で協力隊経験を生かすために協力して下さる先生との連携、(5)経験を生かすための情報分析(KJ法など)、(6)全国に散らばる体験談や実践事例聴取、(7)開発教育協会(DEAR-YOUTH)との連携、(8)その他(本の出版について、大学での講演)など



2.「関東教育支援ネットワーク」の方向性

(1)帰国隊員の前で講演

教員を目指したい帰国隊員の前で、「公立学校の教員として求められる教師像」として講演(2009年1月)したことがきっかけである。また、協力隊経験者の教育に関する意見・情報交換を気軽にできる場が欲しいという思いが発足のきっかけである。

(2)メンバーの構成と流れ

協力隊経験者で教壇に立っている多くの若手の教員で構成しているため、現在の教員の日々の学校生活を振り返り、その生活の中で還元できる活動を考えている。しかし、最近の教育過程の急激な変化の中で実施が難しいことは言うまでもない。協力隊経験の還元について、実施可能なことを模索している。民間企業で働いているが教育に興味・関心のある協力隊経験者の意見を大切にしている。幅広い意見を取り入れることが、教育現場での実践につながると考えている。また、開発教育(DEAR-YOUTH)のメンバーの参加により、開発教育の考え方と協力隊の体験を結び付けて日々の授業に取り入れることも重要であると考えている。母国語の重要性を感じ、言語活動の今後について考え、話すこと、書くこと、聞くこと、読むことについて日本語、また、他国の言語について考えている。

(3)協力隊出身者を中心とした組織を作ることの意味

現在の社会情勢をみて、将来の日本を考えた場合、子どもたちは日本人としての資質や能力を高める必要があると感じている。そのためには、子どもたちの身近に「生きる力」が育つ学校教育の現場を作ることが必要不可欠である。その中の一つとして、協力隊員経験をもった教員は、今後の日本の教育の改善に大いに貢献

できる資質や能力があると考えている。子どもたちの内面、心を育てることが「生きる力」を育てる学校教育の創造につながると考えている。

今の社会情勢を国内から海外を見るだけではなく、海外から見た国内を考えることの大切さを協力隊出身者は肌で感じている。海外で暮らしている隊員経験者は、自身が派遣先の国でマイノリティーである感覚を肌で感じている。異国の文化を吸収し、日本の子どもたちの教育に生かすための多くの体験を生かすことができると確信している。身近にいる教員が協力隊経験者であって、海外の体験や考え方を子どもたちに橋渡しできる状況にあることは、教育業界に置いて、宝であると考えている。宝の持ち腐れにならないためにも、日々の学校教育活動の中で、海外の体験を還元する計画を立て、実施し、見直し、さらに再実施していくことが重要であると考えている。今の組織では、子どもたちの思考力・判断力・表現力を高めるために、日々の授業の中で協力隊の体験を活用できる方法を増やしたいと考えている。世界に飛び出していく未来の子どもたちのために役に立つ教育実践例を増やし、協力隊経験者とそうでない教員が、お互いに多くのストレスを感じないで進められる授業の実施など、日常の学校生活で役に立つ方法を考えていきたい。

3. 関東教育支援ネットワーク開催について

(1) 会合の日時と場所

学校の年間行事に合わせ、時間の取れそうな土曜日を会合の日としている。時間は、午後 3 時 00 分からで、約 3 時間が会合時間である。場所は、JICA 広尾地球ひろばである。現在(2010 年 2 月)までに、7 回の会合を実施している。

(2) 会の流れ

①自己紹介 ②内容(実践例報告、授業の模擬試行)③交流・意見交換 ④連絡 (⑤懇親会)

(3) これまでの具体的内容

- 帰国隊員の体験談発表:(1)パワーポイントを使った赴任国の体験談発表と授業事例報告,(2)帰国隊員がもっている赴任国のグッズ(洋服,楽器,お札等)の紹介と授業事例報告
- 世界経済を知るための「貿易ゲーム」の事前実施:(1)その後,小学校の 5 年,6 年生の教室で実施,(2)ビデオによる授業事例報告
- 外国籍児童生徒の理解と課題の現状把握
- 小学校外国語活動への教材導入について(冊子 JICA「地球の教室」)
- 青年海外協力隊派遣教員の帰国後の還元(東京都市大学准教授)
- 「学校現場で時間を作るために」をテーマにした KJ 法分析(エクセルによるクラスター分け)
- 国語科による授業事例報告(連続型・非連続型のサブテキストを使った読解力育成-PISA 型/意見文作成の実践報告)(ビデオによる授業事例報告)
- 兵庫 OV 教育研究会の実践事例報告(丸山教頭(ホンジュラス OV)による報告)
- 出版について(体験談のブログへの掲載)

4. 成果と課題

【成果】

- 現在メーリングリスト登録完了者は約 50 名
- 関西地方と関東地方の連携
- 現在隊員として活躍しているメンバーとの連携
- 次期協力隊派遣予定メンバーと意見交換
- 開発教育メンバーとの連携
- 協力隊経験者ではない参加者との連携による意識共有
- 今年度は,年 7 回の実施

【課題】

- 研究会参加メンバーが固定化されてきた。
- 会は、勤務校の年間計画を見て、なるべく忙しくない時期の土曜日 PM3:00から設定しているものの学校行事や業務等の影響で、メンバーの出席が当日まで把握できない。

5.存在意義

開発途上国での経験を生かすことができる。また、同じような境遇の人が多いため、お互いの生きる道、進んでいく道を確認し、日本の未来の教育についてアイデアを出し合える。児童・生徒を中心として考え、ふるさとや日本のことについて胸をはって紹介できる個人を作ることができる。感受性の高い子を育てる教育につながる。横にいる人と信頼関係を築くことが大切で、思いやりのある子を育てることにつながる。

6.提案

- (1) 学校現場における教材研究の時間の確保と教材化をして欲しい。
 - (2) 校務分掌を見直して欲しい。
 - 教科書発注業務, 集金処理等, 事務的な仕事は事務にお願いしたい。(負担が大きい。)
 - 協力隊経験者の取り組んできたことの教材化:総合的な時間や外国語活動だけでなく, 国語, 社会, 道徳, 音楽, などすべての教科の中に協力隊経験を盛り込んだ教材化ができると考えている。
 - 協力隊経験のない人との連携を考えた授業を考えて欲しい。
 - (2) 持てる力を十分に発揮できるシステムを作って欲しい。
 - 講演, 授業等が負担なくできるシステム作り
 - 適切な人事異動

「広い視野でものごとを考え、身近なことでできること」を組織的に考えることができる環境を作りたい。

日本という国, 日本人として自分たちを捉えて考えること。

日本人として, 自分たちができることを考えること。

そして,

地球人として, どう生きるかを考えるためのヒントを児童・生徒に与えること。

人として生きるための重要な助言ができる。

ネットワーク構築 と 制度の効果的展開にむけた提案

関東教育支援ネットワーク
青年海外協力隊 タンザニア理数科教師OB
東京都町田市立南つくし野小学校
教諭 吉岡 康裕

関東教育支援ネットワーク

開発途上国での経験を日本の教育に活かす。

活動内容

- ①教育活動に活かせるアイデア交換と実践
- ②学校現場で協力していただける教師との連携
- ③派遣前・派遣中の協力隊員の支援と連携
- ④経験を活かすための情報分析
- ⑤実践事例聴取
- ⑥活動のアピール 出版 講演について

派遣前隊員との連携



派遣中隊員との連携



国語の授業実践



イメージ図



情報分析: (収束思考法、発散思考法)



児童中心

- 児童をとりまく環境(影響力の大きいもの)
インターネット、本、新聞、TV、ゲームなどがあるが、
身近な人からの話⇒影響力が大

家庭(保護者)、学校(教師)、地域

- 世界的な視野をもつこと(Think globally)
 - 身近なことと考へ行動すること(Act locally)
- 思いをもち
行動に移せる子

授業

•国際協力で得た体験(JOCVの体験)は、全教科で生かせる。

しかし、自分の努力だけでは、体験は活かせない。

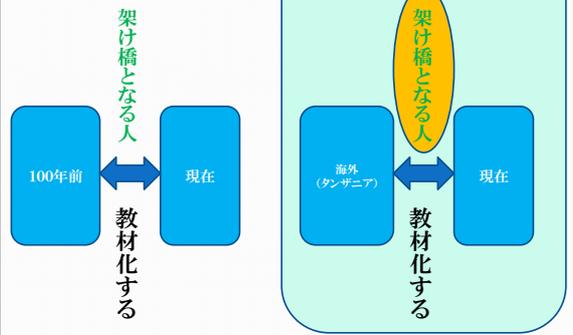
POINT
着任校の先生方が、国際協力について関心をもってくれること。
新しいことへ挑戦する意欲・関心があり、好意的・協力的であること。

関東教育支援ネットワークなど、JOCV隊員や教育に関する交友関係を
広くし、たくさんの方の知見を得る必要がある。(情報交換、意見交換)

→ 具体的にできることを継続して、積み重ねていくこと

国語、社会、算数、理科、道徳、音楽、図工、体育、特活
外国語活動、総合的な学習の時間(食育、キャリア教育、
情報教育、環境教育、国際理解教育、保健)

架け橋



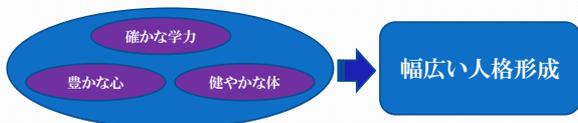
将来

日本人として児童が目指すものをもつ。

地球人として、「どう生きるか」を考えるきっかけを作る。

(協力隊経験者は、感覚がピュアである。仕事、時間に追われる生活から、一度、自分を見直している。)

⇒今、自分たちに何ができるか。



帰国後の還元・貢献活動

- 参画する人々が必要である。
⇒多面的・総合的に捉えて、意図的に活用していくことが必要である。
- 今の社会は、「公」を眺めていたらいいという時代ではない。
⇒「公」の働きを知り、自分たちも中で活動していく必要がある。

教員ネットワーク構築に向けた取組と 「現職教員特別参加制度」の効果的推進に向けた課題・提案 ～兵庫 OV 教員研究会から～

兵庫県香美町立柴山小 教頭 丸山一則
(63/3 ホンデュラス技術科教師)

1.はじめに (兵庫 OV 教員研究会とは)

『兵庫 OV 教員研究会』とは、青年海外協力隊に限らず、日系青年ボランティアやシニアボランティア、専門家も含めて、途上国での活動経験を教育現場に活かすことを目標として平成 18 年より活動を開始している。(OV: オールドボランティアの略)

活動内容としては、

- ① 現職 OV 教師のネットワーク作り
- ② 互いの教育実践の交流と共有
- ③ 派遣中の現職参加教師の支援
- ④ 教員を目指す帰国隊員等の支援
- ⑤ 隊員を目指す現職教員の支援
- ⑥ その他 としている。



2.「兵庫 OV 教員研究会」発足までの経緯

(1)兵海研(兵庫県海外子女教育研究会)からの学び

兵庫県には、日本人学校経験者を中心とした組織「兵海研」がある。香港日本人学校に昭和 58 年度から 3 年間派遣されていた私も所属している。兵海研では、帰国報告会や派遣激励会だけでなく、月一回(現在は減っている)の派遣研修会、海外派遣中の情報提供、家族を交えての交流、他団体を巻き込んでの研修体制、県内各地区別の組織、さらに、全国組織(全海研)まで完成させ NPO として活動している。

(2)協力隊出身者は

平成 18 年の時点で、兵庫県但馬地方における日本人学校経験教員は 14 名に対して、協力隊 OB 教員は 2 名。人数が少ないこともあるためか、日本人学校経験者は兵海研もあってほぼメンバーがつかめているのに対して、協力隊経験のある教員が兵庫県内にどれほどいるのか見当もつかなかった。(現在もわからずにいる)

(3)協力隊出身者の組織を作ることの意味

日本人学校教員がおもに先進国と呼ばれている国や途上国であっても都会である首都で生活しているのに対して、JICA ボランティアが活動する地域の多くは、途上国の現場。両方を経験している私は、日本の子どもたちにはぜひ、途上国の現実からたくさん学ぶべきであり、それ以上に、国際理解教育の根本は、「ふるさとと心が胸を張って世界に誇れる子どもたちを作ること。」であると考えていた。そのために一人奮闘し、兵海研の場でも交流をしてきたが、ぜひ協力隊出身者の組織を作らなければならないと考えた。

(4)兵庫県教委「自主研究グループ」の活用

平成 17 年 2 月に広島に招かれ、海外派遣事前研修会(青年海外協力隊)に参加。兵庫県では行われていないものであり、県教委、JICA とともに知り合いを通じて働きかけてみたが、動きはなかった。また、出身者リストだけでもいただけないかとお願いしたがこれも個人情報保護の壁に阻まれ、これは自分ではじめるしかない

と考えるようになった。県教委「自主研究グループ」:二人以上の賛同者があれば5万円の研究費をつける。というもの。私の手元にあった最後の帰国隊員住所録(H12年度版)をもとに、兵庫県内のOB教員(小・中のみ)34名に別紙のような手紙を出した。半分以上が宛先人不明で返ってくる中、8名の賛同者があった。→第一回兵庫OV教員研究会へ

3.兵庫OV教員研究会の内容

(1)期日と場所

年3回。夏・冬・春の長期休業中の土曜日、午後1時30分から開会。期日は1年前に決定済み。場所は、JICA兵庫の会議室を借用。

(2)会の流れ

- ①自己紹介 ②実践報告等2~3本 ③交流・意見交換 ④連絡 ⑤懇親会

(3)これまでの内容例

- ①日本→アフリカ好きの子どもを育てる(ガーナ理数科教師→三田市小学校教諭)
- ②外国籍児童生徒の課題と支援の現状(ニカラグアSE→兵庫教育大大学院→神奈川教員)
- ③小学校英語の課題と展望(ガーナ短期専門家→姫路市小学校教諭)
- ④2度のブラジルから学んだ「日本人の本質」(日系シニア→加西市中学校教頭)
- ⑤大学と小学校との連携(ブータン卓球→天理大准教授)
- ⑥教員派遣の現状と開発教育, JICAにおける基礎教育分野の協力(JICA兵庫)
- ⑦外国人児童生徒の理解のために(ニカラグア青少年活動→芦屋市中学校教諭)
- ⑧教員をやめて見えてきたもの(ホンデュラス養護→広島市小学校教諭→シニア→民間)
- ⑨パキスタンでの理科実験授業とイスラムの女性課題(パキスタンSV理科→たつの市中学校教諭)
- ⑩カウンセラーとして見えてくること望むこと(JICA進路カウンセラー)
- ⑪青年海外協力隊派遣教員の帰国後の還元(東京都市大学准教授)
- ⑫一人が一人世界の友だち→クラスの子ども一人一人に隊員一人をお願いして、その隊員を真ん中において、途上国の子どものとの交流を複数回する。
→途上国に友だちができる。→ふるさとを伝えながらその良さに気づく。
→本当の幸せと生き方について真剣に考える。(別紙参照)
・現隊員と小学生とのカード交流。(Jocv-hyogoとの連携)
・感動体験から世界とつながる(ホンデュラス技術科教師→香美町小学校教頭) 等

4.成果と課題

【成果】

- 現在メーリングリスト登録完了者は71名→ネットワークができつつある。
- 兵庫県内だけでなく、大阪、京都、広島、東京のメンバーも含まれている。
- 現在隊員として活躍しているメンバーが6名(JICA兵庫からの紹介)
- カンボジア現職隊員が音楽指導の中で支援が必要なとき、メールによって手助けをすることができた。現隊員への支援例
- 年3回の研究会を定期的に設定することで、研究会が認知されはじめただけでなく、そこから何か生み出そうという気運が盛り上がりつつある。→研究誌の発行
- 10回の研究会で、実践報告が25本を超えた。

【課題】

- 研究内容が研究会メンバーのみで止まってしまっている現実(今回は特別)
- 会費等を集めていないためか、研究会メンバーであることの意識が低い。
- →会費がないために、自由に気楽に参加できるというメリットも。
- 予算がない。→縛りが無い。
- 組織化されていない。

5.存在意義

- メンバーにとって、この会があることで、JICA ボランティア出身者であることの自分の立場を堂々と明らかにし、自分の活動を振り返り、評価され、それらをどう活かすかの道筋を発見できている。→自らの存在意義を確認する場。逆に JICA ボランティアであることを明らかにして活かせる場が、学校現場にはないという現実。→外国で好きなことをやってきた人？
- 途上国経験を思い切り語り合い、日頃出せない思いを吐露することで元気になる。

6.今後の展望

「兵庫 OV 教員研究会」は、兵庫県内の子どもたちに対して、自分たちの経験をいかに返していくかを目的にスタートした会であったが、参加者一覽でも明らかのように、毎回、大阪・京都他からの参加者があるだけでなく、レポート報告もしてくださるようになった。それぞれ「大阪教育ネットワーク」や「京都市国際理解グローバルキッズ研究会」と言った独自の組織を持っている仲間であり、今後、夏の会については近畿の仲間が一堂に会して研究や親睦を深めることで合意できている。滋賀、奈良、和歌山、さらには鳥取、岡山も加えた、関西ネットワークが見えてきている。ぜひ、進めたい。

7.提案

(1) 協力隊の 2 年間で身につけたものは何かを教え、活用させる。

漠然と感じつつも、きちんと伝えてあげないとその人の実となり力とはならない。一般には「国際感覚」や「外国語」と思われがちだが、それだけではなく、教育分野では、より重要なことがあることがこの会で確認できた。このことを教育委員会や管理職はもちろん、周りの教員が共通認識として持つことで、OV 教員は力一杯活躍できる。それは、

- 「困難な環境の中で、自ら課題を見つけ、周りの協力を得ながら、課題解決に努力したこと。」このことは、学校内でも絶えず起こっていること。なべぶた式の組織構造である日本の学校内では特に重要である。
- 日本の中において、大切なこととして学び、身につけてきた「約束を守る」、「誠実に物事に当たる」ということは、世界のどこに行っても大切なことであるということ。このことを子どもたちに自信を持って伝えることは、我々の使命である。
- 途上国での活動中、我々は少数派の外国人として生活している。つまり、日本においてマジョリティの立場が活動中はマイノリティとなる。この逆転の経験は貴重。第 1 とも関連するが、支援される側となったとき、人と人をつなぐ役目の大切さは今の教員に特に求められるものである。
- 世界中に広がる友だちのネットワーク。教員の世界は狭いとよく言われる。日々忙しさの中にいる教員にとって、訓練中や隊員時代に培ったあらゆる職種・そして全国・さらに世界に広がる友人・知人のネットワークは何物にも代え難いもの。人の大きさは、人とのつながりの強さや大きさともいえる。

(2) 協力隊に行くことだけを目的とさせない

- 協力隊には、そのねらいが二種類ある。派遣国からの要請によって行くのだが、任国での活動にこそ価値があるものと、帰国後にその価値が上がるもの。とがある。自動車隊員などは前者だが、教育分野は後者だ。
- とはいえ、協力隊参加を希望するもののほとんどが、途上国での活動を目的としている。途上国での厳しい現実の中で自分がどれほどチャレンジできるかに、人生のすべてを懸けているかのように出発していく。しかし、帰国してからの方がずっと長いことに気づいて出発する人は少ない。
- 出発する前から、帰国してからの教員生活に、この 2 年間でいかに活かすかが大きな目的であることを肝に銘じて出発させることが重要。そのためには、帰国後の実践例を出発前にたくさん示しておく。いかにこの 2 年間で教員としての財産とするのかを見通しを立てさせながらの 2 年間とさせる。個人任せにせず、支援・協力し、よりよい活動となる指示をする組織が必要である。

青年海外協力隊→任国での技術支援を主目的としたもの

青年海外体験隊→帰国後、その体験をいかに現職で活かすかを主目的としたもの

(3) 持てる力を十分に発揮できる人事異動を

すぐ近くの学校にペルーからのニューカマーがいてスペイン語だけでなく、生活指導全般にわたって苦勞しているにもかかわらず、こちらではラテンからの OV 教員がくすぶっている。といった話を耳にする。(1)のこととも関連するが、持てる力を十分に活かす人事をお願いしたい。

8.おわりに

『求む男子。至難の旅。僅かな報酬。極寒。暗黒の長い日々。絶えざる危険。生還の保障無し。成功の暁には名誉と賞賛を得る。』1914 年、南極大陸横断に向け、ロンドンの新聞にこの求人広告を出した、サー・アーネスト・シャクルトン。志願者は 5000 人を超えた。協力隊出身教員には、同じ気概があるに違いない。にもかかわらず。。。

協力隊出身者であることを隠す教師、忘れたい教師、逆に、協力隊のことを前面に出しすぎて浮いてしまっている教師がいる。もったいない。2 年間の経験は、ほかでは得難いかけがえのないものだ。ただ、多くの隊員出身者は一匹狼的で、組織の一員となることをいやがる傾向がある。気持ちが熱すぎるのだ。

途上国での経験を元に、学校現場で頑張ろうと意気揚々と帰国してくる OV を待ち構えている学校現場の現実、やはり厳しい。任国でも帰国後も理科教師をしている OV の一人は「あれほど授業準備に没頭できる時はなかった」、「今は、理科室に上がる階段を上り始めてからどうするか考える」と。そのギャップに耐えられず、ドロップアウトしてしまう OV 教員もいる。

ここはやはり、システムを作らねばならない。教育委員会と管理職が、「協力隊経験は教師としての力量を育てるよき研修期間である」と確実に認識し、彼らの生きる環境を整えておく必要があると強く感じる。このレポートがその一助となることができればこれほどの幸いはない。

2010.03.01 文部科学省

ネットワーク構築に向けた取組と
制度の効率的推進に向けた課題・提案

兵庫OV教員研究会から

兵庫県養父市立粟山小 教頭 丸山一則
(63/3 ホンデュラス 技術科教師)



はじめに 「兵庫OV教員研究会」とは

目的: 途上国での活動経験を、教育現場にいかす。
→青年海外協力隊・日系社会青年ボランティア・
→シニア(海外・日系)ボランティア・専門家(短期・長期)・その他

活動内容:

- ・ 現職OV教師のネットワークづくり
- ・ 互いの教育実践の交流と共有
- ・ 派遣中の現職参加教師の支援
- ・ 教員を目指す帰国隊員等の支援
- ・ 隊員等を目指す現職教員の支援
- ・ その他・・・

「兵庫OV教員研究会」発足までの経緯 ①

兵海研(兵庫県海外子女教育研究会)からの学び

- ・ 帰国報告会、派遣壮行会
- ・ 月一回の派遣研修会
- ・ 海外派遣中の情報提供
- ・ 家族を交えての交流
- ・ 他団体も巻き込んだ研修体制
- ・ 各地区組織と全県レベルとの関連
- ・ 全国組織(全海研)との強いつながり

しかし

- ☆ なんかぬるい、日本人学校の先生
- ☆ 熱すぎる、協力隊出身者

「兵庫OV教員研究会」発足までの経緯 ②

協力隊に横のつながりのないことのジレンマ

- ・ 兵庫県但馬地域には二人だけ
- ・ 平成17年2月広島にて
海外派遣事前研修(青年海外協力隊)に参加
- ・ 兵庫県では行われていなかった。
- ・ 県教委、JICA兵庫ともに働きかけてみた。
→ 先に進まない
- ・ 個人情報保護の高い壁

自分でやるしかない!

「兵庫OV教員研究会」発足までの経緯 ③

県教委「自主研究グループ」の活用

- ・ 1グループ 二人の賛同者 5万円の研究費
- ・ 帰国隊員住所録(H12年度版)をもとに、兵庫県内のOV教員34名(小・中)に手紙を出す

賛同者は8人

第1回兵庫OV教員研究会へ
2007年12月27日
JICA兵庫にて



これまでの研究内容

- 1 アフリカ発・保護者とともに考える国際理解教育
～派遣教員発行「ガーナ便り」を通じて～
(ガーナ理科教師、専門家 三田市小学校教諭)
- 2 外国籍児童生徒の課題と支援の現状
(ニカラグアSE 兵庫教育大学院生)
- 3 小学校英語の課題と展望
(ガーナ短期専門家 姫路市小学校教諭)
- 4 2度のブラジルから学んだ「日本人の本質」
(日系シニア 加西市中学校教頭)
- 5 ひとりがひとり世界の友だち・ホンデュラステレビ会議
(ホンデュラス技術科教師 香美町小学校教諭)

等



5 ひとりがひとり世界の友だち・ホンデュラステレビ会議 (ホンデュラス技術科教師 香美町小学校教師)

- ・学校に来ると、毎朝メールチェックをする小学生
→ 「〇〇ちゃん、〇〇国からメール来とるで！」
- ・25人の6年生、ひとりひとりが隊員とメール交流、
ここから、現地の子どもたちと手紙の交流へ。
→ 途上国への見方の変化
汚い、貧しい → 家族の仲がいい
→ 本当の幸せ
- ・修学旅行で、国際交流
→ 広島平和公園で「あーゆーふりーなう？」
- ・ホンデュラスとテレビ会議
→ 音声はさっぱり通じなかった。
→ 言葉は通じなくても、心は通じ合える。



成果と課題

(成果)

- ・ 現在、構成メンバーは71名
 - ☆ 兵庫県在住者以外に、大阪府、京都府、広島県、東京からも賛同者が集まってきた。また、現隊員も6名。
 - ☆ 年3回の研究会を定期的実施。
→ 春、夏、冬の休業中 → 1年前には、期日を決定
 - ☆ 10回の研究会で、実践報告が25本以上

(課題)

- ★ 研究内容が研究会メンバーのみで止まっている。
- ★ 会費を集めていない。→ メンバーとしての意識が低い
→ 自由に気楽に参加できる
- ★ 予算がない → 縛りが無い
- ★ 組織化されていない

存在意義と今後の展望

研究会の存在意義

- ☆ 自らの存在意義を確認する場
→ 同じ立場を持つもの同士で、
自らの活動をふりかえり、
評価され、どう活かすかの道筋を発見する場
- ☆ 元気になれる場
→ 思いっきり話し、日頃出せない思いを吐露できる
- ★ 学校現場では、なかなか話せない。
→ 外国で好きなことをやってきた人？

今後の展望

- 夏の研究会では、大阪・京都とともに共同開催
→ 関西ネットワークへ

提案①

- ☆ 協力隊の2年間で身につけたものを教え、活用させる。
→ 教えてあげないとわからない
→ 気づくのに時間がかかる
- ① 困難な環境の中で、自ら課題を見つけ、周りの協力を得ながら、課題解決に努力したこと。
- ② 「約束を守る」「誠実に物事に当たる」といった、日本で当たり前のことは、世界のどこに行っても大切なこと。
- ③ マイノリティ(少数派)となったとき、支援される側となったとき、何が大切であるかわかる。
- ④ 世界に広がる友達のネットワークを持つ。

提案②

☆ 協力隊に行くことだけを目的とさせない

- 「協力隊に行きたい」
→ 途上国の厳しい現実の中で自分がどれだけチャレンジできるか試したい。
しかし
→ 帰国後の方がずっと長い

出発前から、帰国してからの教員生活に、この2年間をいかに活かすかが、大きな目的であることを肝に銘じさせて送り出す。
→ 帰国後の実践例を出発前にたくさん示しておく。

この2年間を、教員としての人生の大きな財産とさせる。
→ 個人任せにしない。
→ 支援・協力し、指示も出せる組織が必要。

青年海外協力隊→ 任国での技術支援を主目的
青年海外体験隊→ 帰国後、その体験を現職で活かすのを主目的

おわりに

- ★ 協力隊出身を隠す教師
- ★ 前面に出しすぎて、浮いてしまっている教師
→ 一匹狼
→ 組織の一員になることが苦手
→ 気持ちが熟すぎる
- ☆ 途上国での経験をもとに、学校現場に意気揚々と帰国するOV教員
→ 学校の現実には厳しい → こんなはずではなかった
→ 戻るのに2年はかかる
- ☆ システムが必要
「協力隊経験は教師としての力量を育てるよき研修期間である」
教育委員会、管理職が確実に認識。
→ 彼らの活きる環境作りを